

そよかぜ診療所での実習を終えて
神戸大学医学部付属病院初期研修医 2年目 米田清史

今回の地域医療実習では、大学病院とは異なる医療現場に身を置くことで、医師の役割や患者さんとの関わり方について深く考える貴重な機会となりました。特に印象に残ったのは、訪問診療や往診に同行させていただいた体験です。実際に患者さんのご自宅を訪れ、生活環境を目の当たりにする中で、病気だけを診るのではなく、その人の「暮らし」や「人生」に寄り添う視点の重要性を実感しました。

訪問診療では、通院が困難な高齢の患者さんをはじめ、終末期を在宅で過ごす方など、様々な状況の方と接しました。患者さんやご家族の生活の様子を直接見ることで、病気の背景にはそれぞれの暮らしがあり、医療はその生活を支える一要素であることを実感しました。患者さんの診察では、ご本人だけでなく、介護を担うご家族にも丁寧に寄り添い、医療だけでなく心理的なサポートも行う先生の姿に、地域医療の本質が表れていると感じました。患者さんとそのご家族が「安心して過ごせるように支える」ことの重みを、身をもって理解することができました。

また、医療技術面でも充実した学びがありました。実習の中で頸部エコーや心エコーの操作を経験させていただき、超音波診断の奥深さと即時性のあるツールとしての有用性を実感しました。頸部エコーでは、甲状腺や頸動脈の観察を通じて、血管病変の有無や動脈硬化の評価などを行うことができ、今後の臨床に直結する知識として大変勉強になりました。また、心エコーでは心室の動きや弁の状態をリアルタイムで観察する中で、画像の読み取りやプローブの當て方の難しさを感じると同時に、その場で循環動態を把握できる強力な診断ツールとしての魅力を再確認しました。

地域医療は、限られた医療資源の中で、多様なニーズに対応していく必要があるため、幅広い知識と柔軟な対応力、そして何より患者さんとの信頼関係が不可欠であることを学びました。あらゆる症状や訴えに耳を傾け、時には人生そのものを見守る役割を果たしている医師の姿には、強い責任感と誇りを感じました。

この1か月の地域実習を通じて、地域医療は単に医療を提供する場ではなく、「人と人との関係の中で成り立つ医療」であることを強く実感しました。患者さんに寄り添い、生活の背景まで理解しようとする姿勢が、信頼関係と満足度の高い医療につながることを学びました。今回の実習で得た「患者さんの生活全体を診る」という視点を大切にしていきたいと思います。そして、医療者としてだけでなく、一人の人間として信頼される存在を目指し、学び続けていきたいと思います。